

さくらそう通信



雨二モマケズ…概要説明を聞く参加者

見学路をまわりながら、解説に聞き入る



田島ヶ原サクラソウ自生地開花期見学会

紙面でもその都度ご報告してきましたが、田島ヶ原サクラソウ自生の保護保存に関する情報を発信する企画として、市教育委員会では平成11年度と12年度に「サクラソウ会議」を開催しました。2回の「会議」では新しい研究・調査の成果などが報告され、会議後に回収された参加者アンケートでも「今まで知らなかったことが多く、大変興味深い内容だった」など、おおむね好評をいただきました。しかし、「サクラソウの咲いている自生地を訪ね、田島ヶ原の現状を見てみたい」という意見も多く、発表者からも同様の企画の提案が事務局に寄せられていました。

市教育委員会ではこうした要望に応えるため、「サクラソウ会議」のひとつの発展形として、13年4月19日に「開花期自生地見学会」を実施しました。見学会当日は、本紙にも度々ご寄稿いただき、「サクラソウ会議」でもおなじみの磯田洋二氏（浦和市文化財保護審議会委員一当時）に解説をお願いしました。

田島ヶ原は、かつては荒川河川敷のそこここに広がっていたサクラソウ自生の貴重な生き残りです。また、そこ

に生育する植物は、サクラソウよりも希少とされるものも含めて250種を超えています。近年、そうした植物（もちろん動物も）の生命を支える力を、田島ヶ原の環境は失いつつあるのではないかと懸念する声が多く聞かれます。「サクラソウ会議」の趣旨も、そうした声に応じて、田島ヶ原の環境の保全とサクラソウをはじめとする動植物の保護保存を考えていこうというものでした。

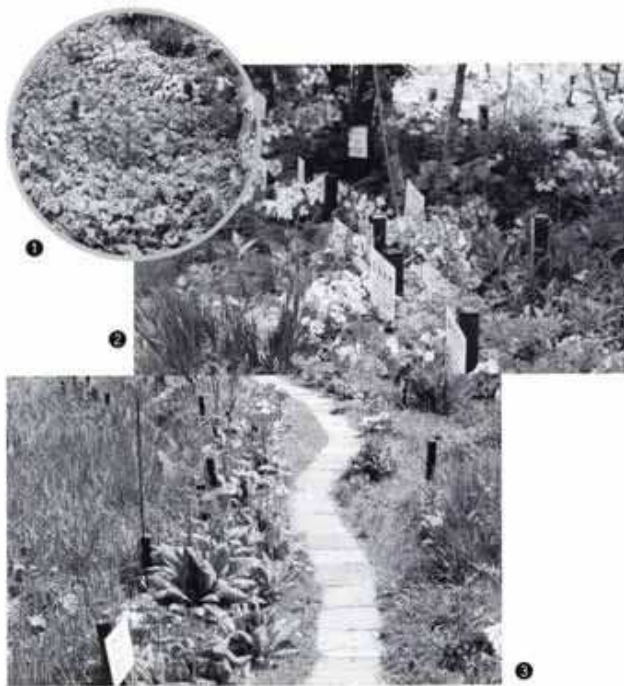
今回の日程は、サクラソウの花を見るには若干早かったかも知れません。しかし、参加者の多くにとって、自生地とその周辺に生きる種々の草木に目を向け、田島ヶ原を護ることの意味について認識を新たにするには、最適なタイミングだったのではないのでしょうか。

サクラソウの自生地を尋ねて

磯田 洋二

1. 軽井沢のサクラソウ自生地

長野県の軽井沢町ではサクラソウを町の花にしています。私が大学生であった昭和30年（1955年）頃のこと、上野駅から23時55分発の夜行列車に乗って軽井沢駅まで行



- ① 野生種のサクラソウの植え込み (軽井沢植物園, 2000.5.26)
- ② 園芸品種のサクラソウの植え込み (軽井沢植物園, 2000.5.26)
- ③ 多彩な花のクリンソウの植え込み (軽井沢植物園, 2000.5.26)
- ④ サクラソウ自生地に立つ町花を告げるプレート (軽井沢植物園, 2000.5.26)
- ⑤ 斜面に広がるサクラソウ自生地 (軽井沢植物園, 2000.5.26)

き、そこで草軽電鉄(廃線になって現在はない)の始発に乗り換えて、当時の鉄道最高所駅であった国境平駅で下車し、浅間高原を散策して沓掛駅(中軽井沢駅)にたどりついて帰るといふ、夜行日帰りの旅を幾度となく楽しんでいました。そして、時間があれば沓掛駅の南にある塩沢湖まで足をのばし、5月下旬から6月上旬にかけて付近一帯がサクラソウの花で埋まるのを見て帰りました。軽井沢に見事なサクラソウ自生地があることは、当時の雑誌「遺伝」に紹介されていたので知っていたからです。

その頃から45年もたった平成12年5月26日(2000年)

に、サクラソウの訪花昆虫(花の蜜を求めて集まる昆虫)を調査するために、軽井沢町のサクラソウ自生地を訪れました。目的地は「軽井沢町立植物園」の中に、当時のままの姿で残されているというサクラソウ自生地です。途中の車窓から眺めると、かつてサクラソウの群落が一面に見られた塩沢湖の付近には、テニスコートなどの運動場、公園、家屋ができていて、塩沢湖がなければここがどこなのか分からないほど変わってしまい、昔の面影は残っていませんでした。

植物園には町の花がサクラソウということもあって、サクラソウとクリンソウの野生種や園芸品種がたくさん植えられていました。園長さんの話では園芸品種の多くは「埼玉さくらそう会」から贈られたものということでした。

(写真①、②、③)

園内をめぐる、南東の一角に高さ約4mほどの高台があり、その斜面の下に「町花・サクラソウ・平成5年8月1日制定」と書かれたプレートが立てられていて、斜面には目的のサクラソウ自生地が広がっていました。(写真④)

サクラソウ自生地のある斜面は緩やかな西斜面で、そこにはミズナラの疎林(木がまばらに生えている林)とクサソテツやサクラソウなどの草原が広がっていて、サクラソウは長さが約20m、幅が約6mの範囲に群生していました。斜面の下は沼地で、沼地に沿って観察路とキハダの並木があり、並木は斜面に当たる西日を遮っているようでした。訪れた時には、斜面のサクラソウ、沼地のリュウキンカ、観察路の縁のクリンソウのそれぞれの花が満開だったので、この辺りは大変に美しく見えました。(写真⑤、⑥)(図1)

ここで、軽井沢のサクラソウ自生地と田島ヶ原のサクラソウ自生地に生育している植物を調べて、表にして比べてみることにしましょう。(表1)

表を見ると、サクラソウの花は、軽井沢では田島ヶ原より1か月も遅れて咲くことや、サクラソウと一緒に生える植物の種類が、軽井沢では田島ヶ原の2倍もあり、しかも、サクラソウとスギナの他には共通する植物がないことに気づくことでしょう。

もう少しわしく見てみましょう。表から夏に茂る植物をさがすと、軽井沢からはハナタデ・シラヤマギク・オオハンゴンソウ・カラマツソウ・ツリガネニンジン・ワレモコウが、田島ヶ原からはオギ・ヨシ・ヤブガラシが見つかります。このことから、夏のサクラソウ自生地は、軽井沢では明るい林間や森林の縁に見られる高茎植物の草原と同じになり、田島ヶ原では沼地や河川敷の湿地に見られる茅の草原になることがわかります。高茎植物とは茎が高くなる双子葉植物のことで、茅とはヨシ・オギ・ススキなどの大型になる単子葉植物のことですから、草原のようすは大変に異なっているのです。

また、帰化植物をさがすと、軽井沢からはヒメジョオン・オオハンゴンソウ・タチイヌノフグリ・コハコベの4種が見つかり、田島ヶ原からは見つかりません。軽井沢の

帰化植物は出現した植物の21%にあたり、4種の被度を合計すると21%にもなります。帰化植物は人間が地面を動かしたり植物を抜いたりした後に侵入してくるので、軽井沢の自生地はかなり人手が入っているようです。

次に、被度を見てみましょう。サクラソウ群落と同じくらいに広がっている場所を調べるので、サクラソウについては軽井沢で40%、田島ヶ原で34%という近い数値になっていますが、出現した植物の被度を合計すると軽井沢では約114%に、田島ヶ原では約87%になっています。このことから軽井沢では植物がぎっしりと重なりあっていて、田島ヶ原では隙間のあることがわかります。このことは、サクラソウが花を咲かせる頃、軽井沢では多くの植物がすでに成長を始めているのに、田島ヶ原では植物の種類が少なく、そのうえ植物の発芽が始まったばかりということに関係しているようです。田島ヶ原に植物の種類が少ないのは、夏にオギやヨシが茂るために、その下は日陰になって植物があまり生えないためだということが分かっています。したがって、軽井沢のサクラソウは多くの植物と厳しい生存競争をしながらたくましく生きているのに対して、田島ヶ原のサクラソウは多くの植物との厳しい生存競争を避けて、オギやヨシの下の少ない植物の間でひっそりと生きているのでしょう。

こうして比べてみると、一口にサクラソウ自生地といっても、場所によって環境や植生のようすが、ずいぶんと違っているのが分かると思います。

最後に、サクラソウの訪花昆虫の調査についてまとめておきます。この日は晴天で、11時30分の気温は25℃という穏やかな一日でした。園内ではエソタンポポ・セイヨウタンポポ・ハルジョオン・カキドオシ・ラショウモンカズラ・ヒメオドリコソウ・タチイヌノフグリ・ハナイバナ・サクラソウ・クリンソウ・ミツバツチグリ・ミヤマガラシ・ナズナ・コンロンソウ・イヌナズナ・ミミナグサ・コハコベ・ウシハコベ・クサノオウ・ムラサキエンゴサク・ニリンソウ・リュウキンカ・スズメノカタビラ・ミゾイチゴツナギ・イチゴツナギなどが開花期を迎え、昆虫もいろいろと飛び交っていました。サクラソウの受粉を助ける昆虫として有力な、蝶類・コハナバチ類・マルハナバチ類に重点をおいて調査したところ、ウスバシロチョウ・スジグロシロチョウ・モンキチョウ・ツマキチョウ・コムシジ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・イチモンジセセリ・ダイミョウセセリの9種の蝶類を確認しましたが、サクラソウの花には11時15分から13時30分の間にスジグロチョウ(2)・ツマキチョウ(2)・イチモンジセセリ(1)の3種が吸蜜に飛来しただけでした。なお、13時20分頃にマルハナバチ(1)が飛来してきましたが、サクラソウの花に止まった瞬間、滑るように草の間に入ってしまい吸蜜はしませんでした。

(埼玉野生植物研究所 所長)



⑥ サクラソウ自生地のサクラソウ群落 (軽井沢植物園, 2005.20)



サクラソウ群落と出現する植物の状況 (表1)

田島ヶ原 (00.4.17調査)				軽井沢 (00.5.26調査)			
出現植物	被度	高さ	開花期	出現植物	被度	高さ	開花期
サクラソウ	34%	14cm	※	サクラソウ	40%	16cm	※
オギ	29%	17cm		ハナタデ	20%	12cm	
アマナ	16%	7cm		シラヤマギク	12%	32cm	
ノウルシ	2%	17cm	※	コハコベ	12%	21cm	※
ノカラマツ	2%	7cm		スギナ	4%	28cm	
ヤエムグラ	2%	3cm		オハシゴソウ	4%	22cm	
スギナ	1%	17cm		ツリガネニンジン	4%	22cm	
ヨシ	1%	15cm		ヒメジョオン	3%	7cm	※
ヤブガラシ	+	5cm		ミゾイチゴツナギ	3%	42cm	※
				イチゴツナギ	2%	31cm	※
				スズメノカタビラ	2%	18cm	※
				ハナイバナ	2%	9cm	※
				ワレモコウ	1%	23cm	
				カラマツソウ	1%	22cm	
				ツボスミレ	1%	19cm	
				タチイヌノフグリ	1%	15cm	※
				ウシハコベ	1%	6cm	※
				ゲンノショウコ	1%	5cm	
				ミミナグサ	+	17cm	※

備考 調査面積は1m²の区画です。被度は出現した植物が、調査した区画の中を占める割合を%で示したものです。割合が1%未満の場合は+で示してあります。開花期の植物は、※で示してあります。

荒川公園の湿地にサクラソウ自生地を出現させるための試み

磯田 洋二

国指定の特別天然記念物田島ヶ原サクラソウ自生地には、現在100万株以上ものサクラソウが生えていて、春になると原野のあちこちを紅色の花が埋め尽くし、それを見に大勢の人々が集まってきました。サクラソウの数も、そして、それを見に集まる人の数も、ここ数年間はあまり変化していません。それで、この状態がいつまでも続くように感じられますが、雨が降ると膝まで潜ってしまうほどの湿地だったこの場所も、今ではかなり乾いてしまい、サクラソウには生きにくい環境に変わっているのです。このままの状態が続くとサクラソウの数は次第に減って、やがて絶滅することが予測されているのです。

サクラソウが絶滅しないように、この場所をもとの湿地に戻せば良いのですが、人手もお金もかかることなので、今のところそのような対策はとられていません。だからと言って、このままサクラソウが絶滅するのを、ただ見守っているわけにはいきません。この場所を湿地に戻してサクラソウに絶滅の恐れがなくなる時がくるまで、サクラソウを絶やさないうための工夫や努力を続けているのです。

その工夫の一つが、指定地とは別の場所にサクラソウの

生育に適した湿地を見つけて、そこに指定地のサクラソウを繁殖させておき、いざ指定地でサクラソウが絶滅という場合に、この繁殖させておいたサクラソウによって指定地の復活を行うという計画です。

この工夫を実現するために打って付けの場所が見つかりました。指定地の脇を流れる鴨川の対岸にある『さいたま市立荒川公園』がそれです。公園はJR武蔵野線の鉄橋と彩湖の流入堤との間にある約4.1ヘクタールの敷地に駐車場があるだけで、他には大きな池とオギの生い茂る湿地が広がっていて、荒川の河川敷の自然を再現した広大なビオトープになっています。この場所はオギの草原で、しかも、湿地ですからサクラソウの生育に適しているはずですが、また、この場所にサクラソウを繁殖させることは、荒川の河川敷の自然を再現する公園の目的にも合っています。

作業は9年6月13日に指定地のサクラソウから種子を採ることで始まりました。採った種子は乾燥しないように保存して、翌年の3月16日に蒔いて苗を育てました。こうして育てた苗を平成11年3月1日に『サクラソウ増殖実験地』へ植えたところ、4月には見事に花が咲きました。種子を採ってから花が咲くまでに約2年間かかりました。サクラソウがここで無事に繁殖していくといいですね。工夫のようすを写真で紹介します。

(田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査検討委員会委員)



①オギの原野を機械で耕す (平成11年3月1日撮影)



③サクラソウの苗を植え終わった増殖実験地のようす (平成11年3月8日撮影)



②サクラソウの苗を植える (平成11年3月1日撮影)



④サクラソウの花で埋まった増殖実験地のようす (平成11年4月17日撮影)

さくらそう通信 14号 平成14年3月25日

編集・発行 さいたま市教育委員会

さいたま市常盤6-4-4 ☎048-829-1721